



坂本龍馬

ひとう



海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/>

3館合同企画

暗殺一四〇年！—時代が求めた“命”か—

坂本龍馬・中岡慎太郎展

平成十九年七月二十八日(土)〜八月二十八日(火)

「龍馬と慎太郎を暗殺した黒幕は誰か？なぜ二人は殺されたのか？」

これは幕末最大のミステリーの一つです。この夏、高知県下の博物館三館が合同して龍馬と慎太郎に関わる展示を行います。

高知県立歴史民俗資料館では、総合展示として「坂本龍馬・中岡慎太郎展」、北川村の中岡慎太郎館では部門展示として「土佐勤王党展」、当館も部門展示として「海援隊・陸援隊展」を開催いたします。

本展では、龍馬と慎太郎をキーパーソンに、幕末維新期における二人の存在の位置付けおよび活動内容について再考します。同時に、「土佐勤王党」、「薩長連合」、「近江屋事件」をキーワードに土佐藩の幕末維新史を再考する事も試みたいと思います。

なお、本展は「暗殺犯は誰か？」を断定しません。三館が展示する資料を判断材料にして来館者が答えを出す、問題提示型の方法を取ります。

展示資料の中心は、京都国立博物館所蔵の血痕のついた屏風や掛け軸。宮内庁や三吉家所蔵の龍馬・慎太郎書簡などです。また、県立歴史民俗資料館

には、武市半平太を始め土佐勤王党の資料や、土佐藩が建白した大政奉還の資料など、土佐藩の貴重な資料が多数保管されていますので、それらも一堂に展示致します。近年、全国各地で龍馬展が開催され、龍馬資料の多くは展示公開されていますが、本展では龍馬と慎太郎と一緒に展示することにより、龍馬展とは違う新たな視点で幕末史を考察します。

龍馬は手紙の中で、「石川清之助(中岡慎太郎)は私同様の人」と姉の乙女に書き送っており、日本の将来のため、二人は土佐を捨てて、天皇を中心とした新しい政府を創ろうと奔走しました。こうした意味では、確かに二人は同じような人です。しかし、幕府を倒し、新政府を創る方法は違いますし、性格も大きく異なる二人でした。板垣退助は二人を回顧して、こんな言葉を残しています。

「中岡にして、暗殺に遭わざりせば、

参議として廟堂(政治を行う場)に立ちて、木戸(孝允)、大久保(利通)と

聘馳して、遜色なかりし人なり」

「坂本にして生存せしならば、或は実業家となりて、五代友厚よりも、今少し大なる者となりしならむ」

二人が暗殺されなかったら…とは板垣でなくとも考えたくありません。

龍馬は船中八策、慎太郎は時勢論を記し、的確な将来の展望を持っています。各館の展示は暗殺によって失われてしまった二人の将来の展望にも触れていきます。

本展は、大人から子どもまで、できるだけ多くの方にご覧いただき、龍馬と慎太郎のことを知って頂きたいため、二人が暗殺された十一月ではなく、夏休み期間中に開催します。暗殺現場である近江屋の復元など、子どもも楽しんで理解できるような工夫を致しますので、ぜひ三館すべてにご来館ください。

展示室トークも行う予定で、龍馬記念館と慎太郎館は随時受付け。歴史民俗資料館は八月五日(日)、十九日(日)、二十五日(日)の午後二時から行いますので、詳しい解説をご希望の方は、この時間にお越しください。



3館合同

見えてきた
「改善すべき方向」

龍馬記念館の改装計画

「本物が見たい」。熱くなる一方の入館者の熱い要望に応えようと、坂本龍馬記念館では、展示環境、収蔵施設の充実などについて県文化推進課の音頭とりで当館、県立歴史民俗資料館、山内家宝物資料館で検討を進めた結果、これまでに「改善すべき方向」がほぼ定まった。今後は、館長レベルでの細かい詰めに入り、早い時期の実現を目指す。



4月に行なわれた検討会＝坂本龍馬記念館講義室で

うハンディが「重要な資料展示はできない」などという指摘を受ける原因にもなっている。ただ、龍馬の人気は衰えを知らない。逆に増える傾向にある。リピーターの方も多く、それだけ目もこえてきて、「複製もいいが、本物を見たい」との声が高まってきている。一方、寄贈、寄託資料も増えてきており、それに伴い収蔵、展示環境の整備が急務となっている。

改装検討委員会では、関連各館の学芸員による専門的立場から、改装策を検討して来た。その結果、貴重な資料を安心して展示するためには、①展示室の壁を二重構造にする②ケースの一部をエアタイトケース（完全密閉型）に交換③非常口に荷棚置き室設置④照明、空調、防火、防犯設備の完備などをまとめた。

これにより、現場段階の討議は終了、これからは予算処置を伴う県と館長や財団本部との検討段階となった。「龍馬の入り口」から出発した記念館だが、今や「龍馬の殿堂」としての地位を固めおり、厳しい県予算の中でも必要に迫られた重要課題であることには違いないだけに前向きに検討を進めていく。

貴重な資料六〇点寄託される

龍馬の姉、千鶴の懐剣も！

本年四月、弘松百合氏（三〇）札幌市在住より約六〇点の貴重な資料をご寄託いただきました。弘松家は、龍馬の長姉千鶴と高松順蔵の長女である茂が嫁いだ郷士の家で、戦国時代から続く家系です。

茂が親から託された実家・高松家をはじめ千鶴の実家・坂本家の資料なども含まれており、高松順蔵（淳蔵・小笠清素）の絹本「楠公桜井の

別」、武市半平太の未公開書簡や牧野富太郎（七十歳代）の歌書、横山黄木（又吉、自由民権運動家・教育者）、賀川豊彦（キリスト教社会運動家）の書、弘松宣枝（茂の子）や下司凍月の絵などの軸物をはじめ文書類など興味深いものばかりです。中でも、龍馬の姉・千鶴（一八一七～一八六一）が嫁入りの時に持参したといわれる懐剣は逸品です。室町時代末期のものだとされる小さな古刀は、無銘ながら千鶴という聡明な女性をしのばせるに十分な存在感があります。



①千鶴の懐剣（上） ②清岡道之助の短刀（下）

また、野根山二十三士の首領であった清岡道之助（一八三三～一八四四）形見の短刀（俊宗、江戸時代末期）も清冽な光を放っています。弘松家と清岡家は親戚です。これらの刀剣は現在展示中。「高知県民のお役に立てればうれしい」とおっしゃる弘松百合さんの気持ちに沿って、他の資料もこれから順次展示公開していきます。

入館者二〇〇万人記念 所蔵品展

当館は、今年三月に二〇〇万人目のお客様をお迎えしました。開館以来一五年四ヶ月での二〇〇万人到達は、歴史系博物館としては非常に早いペースです。これを機会に、感謝の気持ちを含めて、所蔵品の中から特に貴重な資料を厳選し、七月二〇日（金）まで所蔵品展を開催しております。

主な展示資料は次のとおりです。まず一つ目は、龍馬の剣術の師、日根野弁治の実家に当たる市川家資料で、初公開資料になります。龍馬も授かった小栗流の和兵法事目録や市川家の系譜などを展示していますが、日根野弁治に関わる資料は非常に少ないため、貴重な資料と言えます。

また、現在長期預かり中の資料で、土佐勤王党の同志・大石利左衛門に宛てた武市半平太の絵入りの手紙は、勤王党絶頂期の手紙で、当時の政治情勢を知る好資料です。文久三（一八六三）年三月、朝廷から幕府に対して攘夷を促す勅使が送られましたが、その護衛を土佐藩が担当し、多くの勤王黨員も含まれていました。その得意な様子

を絵で表現すると共に、今後攘夷が実行されることを見越して、武器などを備えるように指示を送っています。

さらに、野根山二三士の一人である新井竹次郎に宛てた中岡慎太郎直筆の手紙は一見の価値があります。この手紙は二四歳の時に書かれています。慎太郎の教養の高さ、精神の崇高さが窺える名文と言えます。「家が貴いといえども君子ではない。逆に賤しいといえども小人ではない。君子なのか小人なのかは人により。家に在るのでは決してない。」と若い慎太郎の情熱が溢れています。

その他、幕末三舟と呼ばれた勝海舟・山岡鉄舟・高橋泥舟の書や、木戸孝允の書、高杉晋作の書、陸奥宗光の手紙、月琴などを展示しており、どれも見応えがあります。出会いの達人龍馬の幅広い人脈の一端を知っていただければ幸いです。

さらに、五月下旬からは、別稿で紹介している弘松家からの寄託資料も展示し、ますます充実しておりますので、ぜひご覧いただきたく存じます。

龍馬を見抜いていた男「樋口真吉」展 （十月一日～十二月十六日）

龍馬の新たな側面も

私が坂本龍馬記念館に来て間もない頃に、「高知の人が龍馬に関心を持たないのは、龍馬が土佐を捨てた男だからだ」と言われたことがあります。棘のように刺さったこの言葉が、小さく疼くことが時々ありました。

龍馬は本当に土佐を捨てた男なのだろうか。晩年、土佐藩士溝淵広之丞に宛てた「人誰か父母の国を思はざらんや」と言った言葉、家族たちに宛てた土佐を思う気持ちは嘘なのだろうか。手紙を読んでいるときに、そんな思いがわきあがってくるものがあります。それはもちろん、「いや違う」という反語が伴っている思いではありません。

そんな私の棘を抜いてくれた人がいます。樋口真吉（一八一五～七〇）です。生まれ故郷の四万十市・中村でもほとんど知られていない人のようです。為松公園の中にある「四万十市立郷土資料館」にはたたくさんの真吉資料が展示所蔵されているにもかかわらずです。地元でそのような状態であれば、高知県そして全国的には言わずもがなといったところ。

私自身、今までさほど深く追究することもありませんでした。

ところが、「飛騰」59号以来ご紹介しているように、南寿吉氏という樋口真吉研究者を通じて、真吉という人物がいかに龍馬に影響を与えたのか。最期を迎える緊迫した状況の時に真吉に自分の命を託すほどの頼みをしていったことなど、私にとっても興味深い事柄が多くあります。

と同時に、龍馬にとって樋口真吉や高松順蔵（龍馬の義兄）といった師の存在がどれほど大きかったのか。また、龍馬にとって土佐という故郷がいかに大切なものであったのかを確信するようになりました。龍馬は土佐を捨てた男ではない。土佐こそが龍馬という男を育て、大きく羽ばたかせたジャンプ台であったのだと思えます。

真吉の足跡や行動は全国に渡っています。特に龍馬との関わりにおいては、新しい観点も浮き上がってきました。脱藩前から龍馬を見抜き育てていた男、樋口真吉とはどういう人物なのか。そんなことを検証する「樋口真吉」展を、楽しみにしてください。

前田 由紀枝

知られざる龍馬の「師」

樋口真吉伝(下)

歴史研究家 南 寿吉

中村、高知そして安芸、各地に残る真吉の足跡

真吉の祖父及び祖先の墓は、高知の大津にある。

「二条山」とよばれる小高い丘。樋口家の墓群にびったり隣接する多数の墓に刻まれる「清岡」の文字。清岡は県東部によくある苗字だ。

真吉の直系曾孫の文太郎氏(四万十市在住)がぼつりと「うちのルーツは安芸らしい」と漏らされた。

それでわかった。実は彼の妹が、芸西村の和食に嫁いでいるのだ。中村からは遠すぎる距離。特別な縁がなくて。北川村出身の中岡慎太郎とも親しく、かれの直筆は真吉の誌画帳に残る。真吉らに宛てた慎太郎の手紙も存在する。四万十川河口の下田港へ慎太郎が来たという口碑もある。

真吉との交友を知った下田在住の知人は言う。

「うちのボケた婆さんに「慎太郎さんがよう来よったのうし」といわれて

も信じなかったが、どうもホンマじゃの」。

半平太釈放と藩論統一を求めて野根山に蜂起した二十士との関係も、真吉のルーツが安芸であるとすれば理解できる。彼は騒動指導者の清岡道之助と峰起直前に、高知の小高坂の自家で



近藤長次郎写真(坐像・右手に拳銃) [高知市立市民図書館所蔵]

語り合っている。「清岡君、時期がまずい。自重せよ。幡多は君とともに立つことはできない」と隠忍を求めた。

沸騰する二十士はついに暴発した。いったんは決別したはずの真吉はこれを見捨てることなく、藩政府に堂々の援護論を述べた。甲斐なく清岡道之助らは全員斬首された。

文久三年九月五日の日記にいう。

「前略」清岡道之助等廿四人昨四日奈半利川原ニテ打首。道之助治之助兩人ノ首岸切ノ梟木ニ上ル」

奈半利川原で、斬首の断を下した責任者は上士の小笠原唯八(のち牧野群馬と改名)。当日に記された唯八の覚え書の筆跡は乱れ、判読が難しかった

ほど、という。

数年後戊辰戦争のさいには、江戸で作戦指揮することをいさぎよしとせず、脱出。みずから会津攻めの最前線に立ち、実弟もろとも、会津の銃弾に散った。

かつて国許で役目とはいえず、有為の若者たちの前途を奪った辛い経験が取らせた行動か。

弾圧する側にも心はあるのだ。

長姉千鶴が安田町の高松順蔵に嫁していたから龍馬もよく安田に遊びに行つた。真吉はこの順蔵とも親しく、安田を訪問したとき順蔵の作った歌がある、明治三年、真吉の死を悼んで作った歌もある。

どうもわれわれが今まで全く知らなかった糸で龍馬と真吉は結ばれていたのだ。

龍馬が刀剣の愛好家であったことは残された書簡からも推測できるが、これも共通項として挙げる事ができる。つまり刀工の左行秀を介して龍馬、兄権平、近藤長次郎そして板垣退助である。

海援隊員で龍馬の留守中に長崎で抜け駆けの罪を糾問され、詰め腹を切らされた長次郎を思い出してほしい。彼は高知城下、上町の饅頭屋のせがれに生まれ、近所の刀工行秀に見い出された。龍馬の家とも近い。江戸入り後も行秀の庇護を始終受けた長次郎。異様に長い刀を差して拳銃を握りしめて素足に草履をはいた姿。私は幕末志士の

典型を見る。写真の後ろにうつすらと優しい刀工行秀の姿をみる。

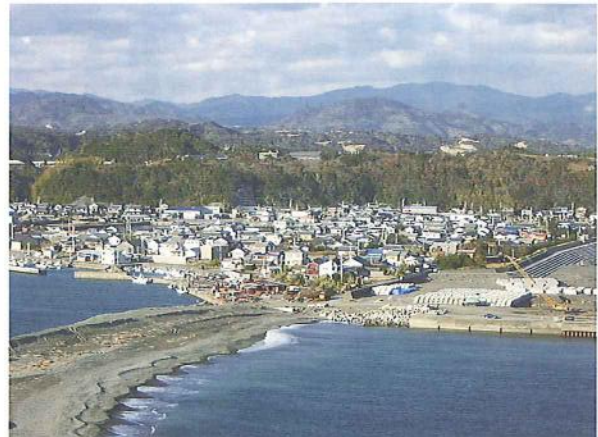
左行秀は変わった刀工であった。その作刀は土佐の様々な侍に愛された。藩主容堂も東洋も龍馬の兄権平も真吉も。鉄砲も鍛えた。

幕末混乱期に板垣退助が不穏な動きをしたときには江戸藩邸から高知へ弾劾密告に赴いた気概の人。忘れたい人人物だ。

吉田東洋は土佐勤王党を弾圧した上士として知られるが、多くの誤解のもとに語られる人物である。

彼は、山内一豊が土佐に入国した際に随伴して来た、いわゆる掛川衆の子孫ではない。先祖は長宗我部侍である。

戦国土佐には一領具足ばかりが存在したわけではない。一領具足だけでは



下田港遠景(四万十川河口)

九州から高知に集中講義にきた大石流の一行に相当に突っ込んだ指導も受けたし、送別の辞も贈った。大石流だから、佩刀は長めに左行秀に作らせた。暗殺された際には二尺七寸の長刀を振るったが果たせず倒れた。

暗殺の背景として「上士憎し」の階級意識とかあげられるが、的外れかも知れない。東洋は地侍の血を引く人間なのだから。

いくさではできない。長宗我部軍団の中核には、專業の武士団がいた。戦略を立て作戦を練り、人員配置、物資の調達・運搬を立案する。

長宗我部侍の中で吉田家は、專業の武士であった。

長宗我部家崩壊後、すべての家臣が野に下った、帰農したわけではない。戦略家として有能な者は土佐を出て他国の大名にトラバユしている。数千石で迎えられる、その例はいくらでもある。

東洋は、江戸で藩主の縁戚の旗本に無礼を働き問責される。その謹慎中に開いたのが高知の南郊、長浜の学塾「小林塾」。

ここでは上士に交じって多くの郷土が学んだ。岩崎弥太郎も間崎滄浪も遠路をいとわず通ったのだ。

東洋赦免を喜ぶ滄浪の漢詩も残っている。存外東洋は、郷土下士にも人望があったのだ。意外ではないか。

東洋は、真吉と同じく大石流を修めた。

九州から高知に集中講義にきた大石流の一行に相当に突っ込んだ指導も受けたし、送別の辞も贈った。大石流だから、佩刀は長めに左行秀に作らせた。暗殺された際には二尺七寸の長刀を振るったが果たせず倒れた。

暗殺の背景として「上士憎し」の階級意識とかあげられるが、的外れかも知れない。東洋は地侍の血を引く人間なのだから。

同じ土佐の血を引きながら、憎しみあう。上士(転勤族)と郷土(地侍)の対立より悲劇的だ。

「上士と郷土の対立」という望遠鏡は幕末土佐の勤王運動を見るに便利な道具であるが、万全では決してない。

上士の勤王党加盟者もいるのだ。先ごろ、北川村の民家で真吉の書簡が見つかった。文久三年(?)五月三十日づけ。宛先は土佐藩の警官あるいは監獄看守ともいふべき徒目付の三人。

内容は

東洋暗殺に武市半平太は関与していないこと、東洋には暗殺されるだけの悪行があったこと、いままら犯人探しは無意味なこと、半平太は中央情報に基に随時建言したが藩は無視したこと、獄中の者(平井収二郎、弘瀬健太そして間崎滄浪)にも寛大な処分を願うなどである。

平井収二郎は龍馬の恋人加尾の兄で、真吉の日記にもよく出てくる人物。弘瀬との交遊は確認できないが、彼の遺刀は県立の歴史民俗資料館に保存されて極めて長大である。

滄浪とは極めて深い。幡多の人々は同郷人を大切にするといわれるが、誠にふたりの関係はうるわしい。滄浪は江戸留学中に著名な剣客(石山孫六)が土佐へ行くとき、「土佐の波は山よりも高い。そのような風土の中に育つた豪傑がいる。その名は真吉(かの地へ行かれたら必ず逢うべし)」という漢詩で紹介している。田野にいた時

には中岡慎太郎らを教え、影響を与えた。滄浪は幼時に父を失い、中村江ノ村に住む伯父の庇護のもとに成長した。彼自身は高知に生まれたが本籍は中村である。中村なら真吉である。

芸西村和食は真吉の妹が嫁いだところ。ここでも最近、真吉の出した藩有小銃の貸し出し許可証が旧家のふすまの下張りから発見された。

丹念に探せば真吉の足跡は高知県下いたるところで見つかるかもしれない。今まで評価されず、無視されて来たからだ。

「探せば自分でも見つけられるかも」ということは歴史に遊ぶ者にとってはたまらない魅力ではないか。真吉は、全ての人を愛し愛された。転勤のたびに家族を引き連れ動いた。愛妻家である。遺児の死を悼む漢詩などぜひ皆さんにみてもらいたい。すべてを大きく包み込んで暖かい彼の人が柄に触れていただきたい。

真吉の姿はすでに薄れつつある。歴史の海に沈黙の林に消えようとする真吉の後ろ姿。

呼び止めても振り返らない真吉。その後ろ姿に声を限りに呼びかけたい。

「真吉さん、あんたようがんばったねえ! 私たちも、今ごろようよう知ったがよ」

拜啓龍馬殿

98通



3月21日〜6月20日

龍馬さんはなんで暗殺されたのですか？ なにか悪いことをしたのですか？それと勝海舟の弟子になってよかったと思いませんか？そしてなぜ新しい物が好きなんですか？家族はやさしかったですか？

(3月26日 大阪府 A.S. 10歳 男子)

強くになりたい
やさしくになりたい
大きくになりたい

あなたのようにになりたい

(3月30日 名古屋市 K.I. 22歳 男性)

坂本龍馬がすきで
桂浜に来てみたいとおじいちゃんにつれてきてもらいました。かけごとびょうぶが見てみたかったです。馬のポストと電話ボックスを見に行ってもいいです。いろいろ見れてよかったです。

(4月5日 大阪府 S.J. 9歳 女子)

昨日はじめて高知に来ました。 桂浜、いい所ですね。雄大な自然、荒々しい波の音、海のおもちゃから昇る真っ赤な太陽を見ていたら、この土地で生まれ育った龍馬さんにふれられた気がします。来て良かったです。ありがとうございました。

(5月2日 群馬県 M.K. 男性)

初めて坂本龍馬記念館に
来ました。私の両親、弟と私の彼と五人で。桂浜もとてもきれいで、記念館は見やすくてわかりやすかったです。父親の好きな高知で彼が結婚のあいさつしてくれそうです。父親のお許しが出たら龍馬さんのおかげです。また来ようと思います。

(5月4日 今治市 E.K. 31歳 女性)

「お〜い龍馬」を見始めてからずっと龍馬殿を尊敬しています。 尊敬できるところは自分の思う強い心があるところ。あなたのようの方がいいです。あなたにも感謝します。これからもあの高い所から太平洋、そして世界を見守っていてください。私には中学生です。勉強部活といそがしいですが日々頑張っています。応援してください。本当に本当にありがとうございます。

(5月6日 今治市 K.T. 12歳 女子)

高知に住んでいながら
ここに来るのは一回目です。今日改めて手紙やいろいろなものをゆつくり見ました。高知には坂本龍馬しかないとよく言われますが、それでもいい、とっても自慢です。今、この時代に生きて政治にたずさわっていたら、この日本ももっとよくなると思いました。私の父は今年89歳になります。誕生日が龍馬さんと一緒で、大正7年11月15日生まれます。毎年、お誕生日が来るたび「龍馬さんが生まれた日と亡くなった日だ」と言っています。龍馬さんの代わりにも一日でも長生きしてほしいです。龍馬さんもう一度生まれてきてこの変な世の中を変えてみませんか？

(4月23日 土佐市 S.O. 54歳 女性)

岡山から初めて桂浜に
来ました。4歳の娘が私の影響で龍馬の大ファンになり、リクエストで来ました。私はマンガの「お〜い龍馬」を見て好きになりました。

(4月30日 宇佐市 M.T. 10歳 女子)

歴史に興味の無い私が
初めて好きになったのは、龍馬さんです。

(4月30日 大分県 K.T. 37歳 女性)

約八年ぶりぐらいにこ
の地にやって来ました。あの時四歳だった娘、二歳だった息子は今は中一、小四と成長しております。あなたが生きておられたあの時の日本はどのように変わっていたのでしょうか。人間の一生はいつどうなるかわかりません。その時に出来る事を命がけて生きていけば悔いは残らないのでしょうか？あなたの生き方は私の憧れです。

(5月6日 広島県 J.T. 38歳 女性)

初めて土佐にやってま
いりました。海のこと、きれいだっこと！龍馬さんこの海を見ていたのだと思ういろいろな思いが湧いてきます。自分も含めて現代に生きている人はどれくらい龍馬さんの心を知っているのでしょうか。龍馬さんの思い、願い、考える事の全ては知れなくとも、この土佐に来て桂浜から海を眺めると、それだけでもおぼろげに浮かんでくる

(5月28日 大阪市 H.N. 28歳 男性)

あなたが見た世界は
かかったですか？あなたのような人がいる限り世界は変わるのでしょうか。あなたのような人になりたいです。

(6月12日 兵庫県 H.T. 23歳 男性)

娘は頭のちぢれ毛と背中にも
があるのに興味を示しています。今日は楽しかったです。

(4月29日 岡山県 S.M. 33歳 男性)

ずっと貴兄にお会いし
たくて、ようやく今日あなたに会いにきました。いろんなお話を聞けれど、初めて見る皆さんの手紙からあなたは本当に変わっていただけれど、面白く、頼もしい男なんだと改めて知り、もっとも好きになりました。

(4月29日)

私は龍馬が大好きで去
きゅうを書きました。それくらい私の心の中にはりようまがかがやっています。

(4月30日 宇佐市 M.T. 10歳 女子)

気がします。 この土佐に、桂浜に、龍馬の地に来たことを自分の人生の転機としている。いろいろな物事の考え方、人への思いやりの心など、見つめなおしていきたいと思えます。

(5月14日 東京都 K.O. 44歳 男性)

21歳の頃(今から7年前)
司馬遼太郎先生の「龍馬がゆく」を読んだから、今までも桂浜に来て龍馬先生にお会いしたい気持ちを持って、来る事が出来ました。昨日から興奮してまったく眠ることができません。今は感動しています。ありがとうございます。

(5月28日 大阪市 H.N. 28歳 男性)

あなたが見た世界は
かかったですか？あなたのような人がいる限り世界は変わるのでしょうか。あなたのような人になりたいです。

(6月12日 兵庫県 H.T. 23歳 男性)

*** 編集者より ***

『拜啓龍馬殿』に寄せられるメッセージで多いのが「念願がかなった」というものです。そして、記念館の前に広がる太平洋を見て、坂本龍馬という人物を育んだ土地を実感されているようです。坂本龍馬が大偉業を成し遂げ、今もなおおかげで、今年のゴールデンウィークも一万人を超える来館者をお迎えしました。しかし、龍馬ファン、そして桂浜の近くという立地の良さにも助けられている面もあり、これからは坂本龍馬記念館の内容をますます充実させていかなければと考えています。現在開催中の「坂本龍馬記念館所蔵品展」では新たに寄託していただいた資料なども順次展示しており、また喫茶コーナーの設置やグッズの充実などにも取り組んでいます。みなさまからのご意見もぜひお聞かせください。

ここは館長の部屋

森 健志郎

「本気の直談判」

五月の連休明け、十日間の休みをもらった。命の洗濯にシルクロードへ出かけた。行く先は中国・甘肅省。目的は天水の麦積山をはじめとする仏さま群との対面。そして取り巻く大自然に遊ぶことである。十五人の仲間も一緒であった。

蘭州から専用バスに乗り換えて九日間、同じバス、同じ運転手さん、ガイドさん。三十人乗りバスだから自分の席を決めてゆつたりくつろぐ。仲間は同じ時間を共有する気持ち一つの家族みたいなものであった。

雪解け水をひとまめに流れて下る黄河のたえずまいに息をのむ。目は皿の如し。炳靈寺、麦積山、水廉洞に登ったつ仏さまには「おつおつ」。思わず手が合わさっている。黄河のラブレンドではチベット仏教の現場を体験した。そこは「小ラサ」と呼ばれている修行の場だ。修行僧の濃赤の袈裟衣が、海抜三〇〇メートル地帯の乾いた空気に舞っている。子供僧の姿も混ざっていた。真剣な眼差しに引き込まれた。ただ、なぜか力まらぬ影は断られた。

帰国前日、蘭州から上海へ。上海博物館見学の後、町に出て驚いた。最もビュローな観光スポット「豫園」など、人波に飲まれるようなもの。まさに人種のもつてある。東京なんか越えてくる。やっぱり規模が違う。揚子江対岸のライトアップされた展望台、ビル群などは別世界だ。世界経済中心の面目躍如である。

光の洪水が記憶の巻き戻しスイッチを押した。脳裏に甘肅省のバスで通過した村々の光景が広がった。四時間車走って、山頂まで段々畑の光景が終わらない。貧しい農村地帯だと聞いた。こんな話がある。母親と娘が一緒に外出できない。母が先に出かけたら、娘は家。逆の場合は母が家。何故かと言うと外出着が一枚しかないからなのだ。一枚を二人で交代で着るわけである。

イルミネーションの下を流行のファッションで闊歩する上海娘の姿をダブらせてみた。貧富の格差はもう底なしに見えた。その溝の深さを思う。そしてやがて来るであろうハブル後の大嵐。日本がたどった道と全く同じ道である。先進国日本は、まだその先を歩いていて病状はさらに重態。先日、農水大臣が自殺した。

同じ頃、龍馬記念館に来た入館者が、館のノートにこんなメモを残していった。――横行する政治悪、経済悪、社会悪、これを正したく龍馬さんと直談判に来ました―― 到来、怒りの時代。――直談判に本気が伝わってきた。

「ロマンのピストル」



「壬申刻印」のついたロマンのピストル

「坂本龍馬記念館に龍馬が所持していたピストルが展示される」。そんなニュースが流れたら、反響は想像に難くない。昨年、岡田以蔵所有のピストル展示となった際には、いつとき館のホームページのアクセスがパンクしている。総じて入館者の皆さんはピストルや刀には興味を示される。

その龍馬のピストルの夢が現実になる可能性が出てきた。明治五年、日本国内にある洋式銃に政府が番号を打った。「壬申刻印」という。その刻印の打たれたピストルがアメリカにあって、幕末史研究家で高知県観光特使でもある小美濃清明さんが、所有者からいたただけることになっているというのである。頂いた後は「龍馬記念館で展示を」。小美濃さんからの好意のお話である。

ただ発射機能があるので税関、警察のチェックなどクリアしなければならぬ問題が何点かあるので、右から左とはいかない。それはこれからチャレンジすることになっている。

が、そのことは別にしても、果たしてそれが龍馬のピストル？時代は確かに合っている。スミス&ウエッソンの型式もびつたり。当時そんなにたくさんピストルが出回っていたとは思えられぬので可能性はゼロではない。小美濃さんによれば、そのピストルは撃鉄部分を修理した形跡があるという。龍馬は寺田屋で幕吏の奇襲を受けた際、ピストルを持った手を負傷している。切りかかってきた刀でピストルが傷ついた？状況証拠が固まってくる。「なかったとは言いが切れない」「ありえないとも言いが切れない」。

ロマンは膨らむ。ロマンのピストルが展示されるかどうか、結果が待ち遠しい。

「海に見える・ぎやらしい」2階へ

展示発表の場として利用していただいている「海に見える・ぎやらしい」をこれまでの中二階から二階に移した。館の南端、空白のステージに続く。龍馬の展示資料を見て、ぎやらしい経由の空白のステージになる。それだけに内容が、龍馬とあまりかけ離れては、入館者を惑わすことにもなりかねないので、イメージを大事にしている。

移転第一回はそんな意味も込めて地元の画家、吉松由宇子さんにお願いした。テーマは「海の詩」。100号の大作9枚を展示した。桂浜境界の海である。次は書道家の沢田明子さんと、ずばり「龍馬と沢田明子展」。絵あり、俳句、散文あり、迫力の字が重なった。

少しずつ改善しながら、意外性と同時に親しまれるギャラリーを目指している。

談話室「海窓」開設 海眺めながら コーヒーも

記念館に新しいスペースが誕生しました。中二階にできた“談話室”です。広い館内でひと休みする所がほしいという皆様の長年のご要望にお応えしました。地下二階から二階の展示室、そして“海に見えるぎやらしい”をご覧になった後、階段をお上りいただくと、ヒノキの椅子に腰掛けて広々とした海を眺めることができる気持ちのよい空間が広がっています。



太平洋を眺めながら一息つく談話室“海窓”

名前は、当館ホームページの職員エッセイ「海に見える窓」の愛称と同じ“海窓”としました。記念館は建物全体が大きなガラス窓のようにも見えます。その窓から太平洋を眺め、もう一度龍馬と語り合っていただくことができればうれしいものです。

中川自民党幹事長来館

このほど自由民主党幹事長・中川秀直氏(63)が、龍馬記念館にいられました。分刻みのスケジュールの中「ぜひ龍馬記念館に行きたい」というご本人の希望で来館。熱心に見学をされていました。



熱心な質問をしながら資料を見る中川幹事長

「龍馬は私の尊敬する人」という中川氏は、“日本の洗濯”の手紙の前で長く足を止めていました。混迷する今の日本を龍馬のように“洗濯”したいと考えていたのでしょうか。龍馬書簡への興味だけでなく、龍馬の姉・千鶴の懐剣に感動したり、龍馬のTシャツを買ったりするなど、予定時間をオーバーしながら和やかなムードで“龍馬”を楽しまれていました。

直行展その後

北見に高知を見る

四月中旬に坂本直行展の返却作業を終えた後、直行の祖父・直寛ゆかりの地・北見市足を伸ばしました。北見市の方たちの熱心なお誘いがあったからです。



北光社入植の常呂川河畔に建つ「坂本直寛」顕彰碑(北見市)

一年前の町村合併で北海道一の面積を持つように北見市は、た北見市は、北網圏というオホーツク海近くに位置する地方都市。市議員の鳥

越氏や北見市社会教育部長をはじめとする方たちが温かな笑顔で迎えてくれました。土佐の先人たちが辛苦の末に切り開いた土地・北見。そのことが百年以上経った今に語り継がれ、姉妹都市として温かな交流を生んでいます。北光社、坂本直寛、澤本補弥、前田駒次らの顕彰碑や、高知ひろばと名づけられた公園などあって、高知と北見のつながりに感慨ひとしおのものがありました。坂本家の研究については今後の課題として取り組んでいきます。

(ゆ)

入館状況

2007年6月20日現在(開館以来5,683日)

◆総入館者数	2,032,570人
◆2007年度最多入館	5月4日 2,707人
2007年度最少入館	4月26日 72人
2007年度1日平均入館者数	353人
◇最多入館	1993.5.3 3,700人
◇最少入館	2004.10.20(台風のため) 8人

編集後記

昨年から年越しの企画となった「坂本直行展」の仕舞いが、5月いっぱいだった。担当のMさんは、八面六臂の大活躍であった。まるで努力に報いるように大きなお返しがあった。貴重な資料類なんと60点あまりが、坂本家ゆかりの弘松家から記念館に寄託されたのである。早速、展示して入館者の皆さんに楽しんでもらっている。ただし館は休めない。夏場の三館合同「龍馬・慎太郎展」秋には「樋口真吉展」「幕末写真館展」へと続く。まさに走りながらの“給水”になる。飛騰63号の締め切りをもう決めている。(モ)

館だより「飛騰」第62号(年4回発行) 表紙題字：書家 沢田明子氏
 〒781-0262 高知市浦戸城山830
 発行日 2007(平成19)年7月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
 発行 高知県立坂本龍馬記念館 http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
 入館料 一般400円・高校生以下無料
 (7月28日~来年3月28日/500円・企画展のため)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください